



# 信友会会報

2011年4、5月合併号

## <<3月例会より>>

信友会3月例会は、東京信徒会会長・目白教会会員の鈴木功男兄にお招きし、掲題に基づき講演をいただいた。伝道150年を迎えた日本キリスト教団のおかれている状況を示し、今後の伝道の進めるべき道筋を示していただいた。

### 信友会 3月例会

「伝道に燃える教団」 ～信徒が与えられた教会が成長するために教会の戦略的伝道論を考える～

スピーカー：鈴木功男兄（東京信徒会会長・教団常議員・目白教会員）

かつて阿佐ヶ谷教会で、名古屋中央教会出身の三輪修三兄の計らいで、私が名古屋中央教会の付属幼稚園で学んだ時の先生であった三輪 薫姉（旧姓大平）にお会いし、先生がいつも私たちのために祈って下さっていたことを伺い感動したことがある。

今回は、「伝道に燃える教団」教会の戦略的伝道論を語るのであるが、教団年鑑などによるデータは、この伝道への展開に水をかけるようなものである。

#### 教会財政に現住陪餐会員について、

日本キリスト教団の教勢の趨勢を17の教区別に、計上収入、現住陪餐会員、教会から教区への納付金、教区から教団への負担金などの推移を分析すると、教団の教勢の停滞が如実に現れている。1970年代の教団紛争の時代からバブル崩壊の時代を経て1990年に教会の計上収入が減少し始めている。この年は現住陪餐会員が減少し始めて9年目であり、教会財政と現住陪餐会員の関係が10年遅れであるとされることを表わしており、教会の計上収入は、現住陪餐会員の増減により左右されることを顕著に現れる。今後も10年にわたり計上収入が減少し続けることになる。

#### 現住陪餐会員・受洗者数

日本キリスト教団における受洗者数について、1948年と2007年で比較する。教団の受洗者数は、1949年の121,844名をピークに、2007年には94,700名になった。2020年を想定すると85,961名となり2007年に比べて約8,700名の減になる。また、2007年の別帳会員は、64,483名である。日本の総人口に比べると1948年では0.14%、2007年では0.074%である。大都市では、0.1%であるが、2千人のコンサートホールに夫婦2人、0.05%になると、家内1人の比率になる。福音が届いておらず、伝道の余地が充分にある。

教団信徒の年齢構成を考えると、受洗者数では、1948年には261,570名である。1948年から58年を第一世代とし103,442名で現在70歳以上、1959年から68年を第二世代年68,185人が現在60～70歳で、両者で63%になる。日本の平均年齢は20.1歳であるので、教団の年齢構成は国のそれとは真逆の数字となる。世代交代を考えると大きな問題である。

受洗者では1948年に11,386名で1952年の15,765名をピークに減少に入った。1968年の教団紛争から急激に減少し始め、また、この時期に12,425名の会員が教会を去っている。1976年から教勢が少しの現状を維持したのは、受洗者が昇天数を上回ったため、1994年からは、昇天者が受洗者を上回り現住陪餐会員の減少になっている。この間に不在会員や別帳会員からも昇天数が出ている。我々は、低迷の40年を過ごしてきている。

#### 教会学校

教団の教会学校の統計で、1950年には121,538名の生徒がいたが、2005年には19,383名となり、84.05%

の減員になっている。1979年の74,200人を最後の急激に減少している。これには、少子化の問題、学校教育の変化、子供の生活環境の変化や伝道力の低下などが影響している。全国の14歳以下の子供数は、1950年29,450,000人であったが、2005年には、17,504,000人と40.57%の減少になっている。教会へは1,000人に1人、小学生では400人に1人しか招いていないことになる。子供たちからの呼びかけが聞こえてくるのではないか。子供が居ないわけではない。我々は1970年以来、30万名から47万名の教会学校の卒業生を送り出してきている。約50万人を育てたのである。それぞれの教会で、同窓会を開くなど、教会に帰るきっかけを与えることが有効ではないか。

### カトリックとの比較

1948年の教団とカトリックの信徒数は同等であったが、2007年ではカトリックが5倍に増えている。受洗者数で見ると、カトリックが7,193名（幼児3,501名、成人3,692名）で、教団は、1,544（幼児120名、成人1,424名）である。カトリックの東京教区の受洗者数が教団の全体を越えている。求道者から受洗に導くシステムがある。カトリックでは、現住陪餐会員と居所不明者の割合が7.1%で教団の現住陪餐会員と別帳会員の割合は、68.1%である。カトリックの居所不明者は、手を尽くして探しても連絡がつかない人と規定され、教団の別帳会員の3年間連絡が取れず、礼拝出席が無く献金を収めない人を役員会の承認で別帳に移すとの規定と比較すると、信徒の取り扱いに差があり、カトリックの信徒への扱いに熱意を感じる。マタイ福音書の100匹の羊の喩が連想される。



教団の現住陪餐会員と別帳会員との割合は、東北教区33.5%、関東教区38.9%で良い比率であるが、全国平均は68.1%である。別帳会員の掘り起こしを再考すべきではないか。

### 特別開拓伝道について

1948年から68年にかけて、ラクーア伝道など特別開拓伝道が、日本人伝道者60人、宣教師54人で行われた。これのための献金は5千万円で、その85%は外国からであったが、15%は極貧に喘ぐ日本人が捧げた。この頃はキリスト教ブームと言われたが、1968年までに163,027名の受洗者を与えられ、教団の2007年までの全受洗者の63%を占めている。この時期の伝道活動は活発であり、宣教の使命を明確に持って一致した伝道を行った。彼らがキリスト教ブームを自ら作ったのである。その後、我々はキリスト教停滞の40年を過ごすことになったのである。

### これまでの数値が示すものを認識して伝道を

- ・教団財政の減退。2000年から2007年間、計上収入が5億7千万円減、受洗者の減少が主原因。今後10年間はこの状態が続く。
- ・信徒の減少。受洗者の減少が1992年に始まり、このままでは中堅の教区が一つ消滅する。この低迷は今後10年続く。
- ・会員の超高齢化。受洗が昇天に追いつかない、63%の信徒が一巡するまで続く。伝道力低下が原因。
- ・教会学校。被害を受けるのは子供達、千人に1人しか招いていない、これまで50万人を育てた。
- ・教会の計上収入。現住陪餐会員と受洗者数が教区の未来を変える。
- ・教会に帰ろうを合言葉に大胆に一步を踏み出そう。1790の教会が受洗者を1教会1人、別帳会員2人を取り戻そう。
- ・ミッションスクールと共同して伝道を。宣教師達のスマイルを思い出して進もう。

私たちは、宣教命令をいただいている。叫び声が聞こえる。み言葉の周りにはこんなに多くの人々がいる。祈りを一つにして大胆に一步を踏み出そう。

(文責：玉澤武之)

## ＜＜4月例会より＞＞

信友会 3 月例会では、東京信徒会会長の鈴木功男兄から、教団の現状を分析しつつ伝道に燃える教団をめざすよう示された。4 月例会は大村栄牧師から、鈴木兄からの示唆をうけて、阿佐ヶ谷教会の「伝道の方向」について語っていただいた。

# 信友会 4 月例会

「戦略的伝道論」～3 月例会の鈴木功男兄の発題を受けて～

大村 栄牧師

### 具体的伝道方策（鈴木功男兄提案）

3 月 27 日の信友会例会において、鈴木功男兄から「戦略的伝道論」により講演をいただいた。その中で次の 3 点が印象に残ったのでそのことから話を始めたい。

#### ・別帳会員の掘り起こし

阿佐ヶ谷教会では、約 600 名の別帳会員がおり、現住陪餐会員とほぼ同数になっている。カトリック教会では別帳会員を居所不明会員と規定し、手を尽くして探しても所在がつかめない会員と定めている。現住陪餐会員との比率は、7.1%であるという。プロテスタント教会では 3 年以上教会に連絡が無く、礼拝出席や献金のない会員は役員会の議決を経て別帳会員に移行することができる扱いで、阿佐ヶ谷教会でももう少しルーズであるがこの方式をとっている。別帳会員の掘り起こしは大切であるので、例えば各部会に別帳会員名簿を公開して部会からも呼びかけを行うなど方策を考えたい。



#### ・元教会学校の生徒への招き

教会学校の活動は、社会情勢の変化から不振を極めており、阿佐ヶ谷教会でも同様である。日本キリスト教団では、この 40 年間に 50 万人の生徒を送り出している。各教会で同窓会を行うなど教会へ招くきっかけを作ることが提案された。阿佐ヶ谷教会では、今年の創立 87 周年記念礼拝後に、教会学校創立 80 周年の記念会を行った。このときに判ったこととして、教会学校に在籍した生徒の名簿が残っていないことである。担任の教師が作っていた名簿が、教会に引き継がれていなかった。今後は名簿の管理をしっかりと定期的なこれら元生徒達に接触する機会を作って行きたい。

#### ・ミッションスクールとの連携

現在では、ミッションスクールはキリスト教主義学校と言うが、これらの学校でのキリスト者教師が半分に満たないところが多く、定例的な礼拝などキリスト教の香り高い教育を行うことが難しいと聞いている。これへの対応は教会単位では難しいが、西東京教区ではキリスト者の教師たちとの会合を持って、キリスト教教育への支援を行っている。教会としても、学校から送られてきた生徒をしっかりと受け止める努力が必要である。さらなる方策の試み

鈴木功男兄のこれら 3 点の指摘を受けて、教会として取り組んで行きたいことをまとめる。

#### ・団塊の世代への呼びかけ

団塊の世代は、戦後生まれの大きな塊の人々であり、これから社会や会社から家庭へ戻る時代を迎えている。社会生活を終えた人々には、ミッションスクールの卒業生や教会へ通った経験を持つ人がいるので、これらの人々に教会に目をむけてもらい信仰に辿りついてもらいたい。これらの人はまた、全共闘世代とも呼ばれ、これまでの社会を支えてきた人たちである。彼らの活躍した時代に教会がどんな状態であり、何をしてきたかを一緒に総括して接点を持ってゆきたい。また、この後に続く「しらけ世代、バブル世代」といわれる人々とも

同様にキリスト教についての接点を模索したいと考えている。

#### ・「教団戦争責任告白」の見直し

次に、戦争の時代のキリスト教の責任を再度検討する必要がある。1967年に行ったいわゆる「教団戦責告白」は、教団にとって大きな躓きとなった。戦責告白は、大村勇教団議長時代に発案し、次の鈴木正久議長時代に、教団内で完全な合意が得られないまま議長名での告白となった。これについては、教団、教区内でもう少し議論を重ねて出されるべきであったと思う。その後、この告白の取り扱いについて、教団内でリトマス試験紙のように扱われ、戦争についての「加害者」の自覚を第一義的にとらえる者とそれを前面に出さない者とに分かれて、ここはどちらの派かなど色分けする争いが激しく行われた。この戦責告白を尊重しながらも自己目的化するのではなく「世のための和解」をめざす立場であるべきである。戦争責任については、大村勇牧師が教団議長として1965年9月に韓国に出かけ、日本の韓国に対する国家的な抑圧に対して教団の立場から謝罪を行ったことを忘れてならない。帰国後の10月1日の礼拝では、「まず行って兄弟と和解せよ」（マタイ福音書5章23～24）の説教を行った。戦責告白を見直すとき、この大村勇牧師の和解の説教を改めて学ぶべきであろう。方策を超えて

#### ・教団「宣教基礎理論」の見直し

この時期には、教団が掲げていた「宣教基礎理論」の見直しが行われた。「教会の利己主義脱却」、「中央集権から地方分権へ」を合言葉に、宣教についての権限を16の教区に委譲することになった。

かつて、東京を中心とした教区が主導権を持って伝道活動を展開したことを批判し、また、教会が自分を豊かにするために勢力を拡大するのではなく、世に奉仕する教会をめざした。そして地方の教区を尊重し、伝道権、資金や責任を地方に与えて自由に伝道させた。その結果は、力が分散して伝道力を失うこととなった。方式伝道と言われた「ラクア伝道」のような、教団が戦略的に伝道を展開して生み出された教会や学校などが継続できなくなるなど、この伝道によって教会や派遣された牧師達が困窮することになった。地方分権を掲げ社会に奉仕するという大衆化をめざした伝道は、一見正義のようであったが、教会形成の本質を損ない困窮を招いた。

#### ・「世のための教会」

信徒で東京神学大学の教授であり、思想的に影響力のあった井上良雄先生の著述をあげたい。

“イエスは、福音書記者たちが地上を歩まれた際の彼の言葉や振る舞いを通して語っているように、そしてフィリピ書の著者が「キリストは、神の身分でありながら、神と等しい者であることに固執しようと思わず・・・」（2・6以下）というあの言葉で語っているように、徹底的に「他の人間のために生きた人」（バルト）として



地上を歩み、他の人に奉仕し、世に奉仕された。もしそうであればその「からだ」である教会が、どうして「教会のための教会」、すなわち自己目的化した教会でありえようか。どうして世に奉仕する教会、「世のための教会」以外のものでありえようか”

教会の使命は、神の言葉を語り続けることである。教会のための教会がめざす利己主義では本当の目的を見失ったことになる。教団の地方分権は失敗に終わった。神の言葉を語り続けることが肝要である。

#### ・戒能信生牧師と新保祐司教授の見解

東駒形教会の戒能信生牧師は、日本キリスト教団史の著作のなかで次のように述べている。

“明治以降、圧倒的な少数者ではあるものの社会の中で果たしてきた教会の役割がある。教勢拡大だけを期待して、この国におけるキリスト教を変質させてはならない。”

日本のキリスト者は人口の1%以下である。韓国では、教会が日本の帝国主義的支配への抵抗の拠点としての役割を担い、教勢を伸ばしてきた経緯がある。これによって民心を把握して、人口の約2割を占めている。日本のキリスト教では、明治政府の成立後、いわゆる薩長土肥の勢力が政治の中枢を独占したことから、立身出世の道を失った幕臣、佐幕などの武家社会に拡まった。この世的な立身出世を希まず、神に身を捧げる方を選んだ。その本質は、近代思想に根ざしており、知的でハイソな方向であった。横浜、熊本、札幌のバンドは、高邁な理想を掲げた若き知識人の集団であった。この傾向は今も続いており、この日本的キリスト教の特質を維持して行ってもいいのではないか。

都留文科大学の新保祐司教授（無教会派）は、著述のなかで次のように言っている。

“日本に1パーセントしかいないクリスチャンだが、内村鑑三一人を生み出しただけでも意味がある。ドイツがカール・バルトを生み出したように。キリスト教は隠れた宗教でよい。社会に隠れたクリスチャンが多いのではないか。だから自分の著作が売れる。直接の伝道ではなくからめ手で。”

“近代は天才の時代であった。本人は優れていてもつながるものがない。21世紀は使徒的人間の時代。本人は貧しくとも神の権能につながる。内村は、天才的人間が使徒的人間に転向したものだ。”

単なる天才は、優れていても何かにつながらなければ意味がない。使徒的な人間は、本人は貧しく平凡であっても神の権能につながる点で非凡になる。内村は天才であったが、浮き上がることなく神につながり使徒的な人間を志向した人であった。21世紀では、平凡であっても神とのつながりのなかで自らの持場を築き、皆で助け合いながら使命を果たすことが求められている。

からし種の喩のように、小さな種がやがて何よりも大きく育って行く。日本のキリスト教が小さな集団でも、この世を底支えする集団でありたい。私たちは明治以降のキリスト教のDNAを受継いでいる。この質の高い立場を保って進みたい。かつてキリスト教の大衆化を試行したが多くの問題点を残した。本当に世のための教会になるために、からし種のようなクリスチャンとしての存在を探ってゆきたい。

（文責：玉澤武之）

.....